

[研究ノート]

日米協同研究の実証的考察（始末記Ⅱ）

藤 田 秀

- 〈目 次〉 §Ⅱ-1 Don't Make Me Laugh
§Ⅱ-2 Slow Burn
§Ⅱ-3 The Burning Bridge is Behind Me

§ II-1 Don't Make Me Laugh

友人の A 君が、こんなことを言った：

A: 君の書いたものを読んでいると、いつもハラハラした。こんな事をして
いると、君はいまに命を狙われるぞ！

F: そんなに、どこがイカンかね。

A: 判らないのか。君と、うっかり関わり合いになったら、折角これ迄築い
てきた「地位・名声」を、一挙に失いかねない。君は自分で思っている
よりも、ずっと危険な人物なのだ。例えば、君の書いた教科書だ。あんな
スタイルのものは、アブナクテ、普通の人にはとても書けない。

F: 「危険人物」かい。

A: いや。「危険な人物」だ。君は、「コイツは、とんでもないアメリカボケ
だ」というだけの理由で、「お眼こぼし」になっているのだ。

F: でも、「地位・名声」と言ったって、もう皆、「功成り・名遂げて」引退
したんだから、いいじゃないか。

A: いや。まだ、勲章というものがある。

F: フーン。そんなもんかね。

A: 呑気なことを、言っている場合じゃないぞ。君はアメリカに居たから、
「アメリカ人はガンを持っているので怖い」と皆が言うが、アメリカに
はルールがある、ということを知っているだろう。ところが、日本には
ルールはないんだ。

F: そりゃそうだ。「クニマツ！」と言って、振り向いたら、バンといく訳
だからな。黙って、いきなり背中から撃つなど下の下だ。でも僕は、
そんな VIP でも何でもない。それでも、ケネディやドゴールのように、
テレスコープ・ライフルで狙うかね。

A: ライフルでくるか、何でくるかは判らない。とにかく、呑気な考えはよ
せ。

F: なるほど、ホームから突き落とされる、ということもあるか。この頃は中央線の「事故」が増えているからな。アンナ・カレーニナという訳だ。

A: まだ言っている！

60 歳になった時、『これからは 1 年ずつ生きることになろう』と決めた。それが 4 年も過ぎ、眉まで白くなった。われわれ昭和一桁の、「ミディ・アプレゲール」は、「命を棄てろ！」と教わってきた……『眼の前で、軍港が壊滅し、市民も女子挺身隊も、粉々にふっ飛んでいる時に、何が江田島だ！ 何が海軍だ！ よくもノメノメと！』……朝、玄関を出て、夕方、再び戻るかどうか判らぬ時代が過ぎた、今頃になって、「人命は、老若男女・貧富貴賤・の別なく、尊い」とか、「人命は地球より重い」などと、いい歳をして！ 戦時中は何と言った。お前が本気なら、あの頃言えばよかったろう！ 五米外して焼夷弾を落とす、「クラシカル・カオス・アソビ」も、火の中の坂道を歩かせる、「ゾーン・リファイニング・アソビ」も、ついに終わったかと思った。マダマダ！

父と一緒に、銀座の地下鉄ホームに入った。GI がカーキ色の山になって、ホームに溢れている。皆で肩を組み、ステップを踏み、蛇行して歌う。「モシ・モシ・アノネッ！ アッ・ソウ・デスカッ！」と、たどたどしい日本語を、「メリーさんの子羊」のメロディで合唱する。やがて、「外苑前」で地下鉄を降りた。父と並んで日本青年館の方に、真っ暗な焼け跡を歩く。隣には、さっきの GI 達が、ワイワイと歩いている。ここだけで約一千名の米軍が、日本青年館や野球場のスタンドの下に、折りたたみベッドを並べて、「東京進駐」の拠点にしている。突然、GI が一人、後から人に抱きついてきた！ 胸をぎりぎり絞め上げ、身体を引き付けると、乱暴に腰をぶつけてくる。皆、急に輪になり大声でわめく、替わるがわるの人を抱き締める。その度に、後から激しく腰をぶつけてくる。抱いたまま、左右に大きく振り回す。暗くて顔は見えない。しかし、こちらは、坊主刈り・兵隊服・ズボン姿・なのだから「男の子」と判っている筈だ。いたずらだろうとは思いますが、仲々「激烈」

だ。五分か、十分か、ついに、足もとがからんで、ふらふらと倒れかかる。突然、一人が「ゴメナサーイッ！」と言うと、急に皆手を放し、ピッピッと口笛を吹いて、青年館の方へと足早に去っていった！

畜生、アイツラ！ 今なら外交問題にしてやるのにと、神宮球場の横を通るたびに思う。集団暴行は、単独より残酷であるという。有り得る事だ。では、米軍の「東京進駐」が終われば、東京には平和が来たか。トンデモナイ！『敵はわれわれ自身』だったのだ！

後で詳しく述べるが、東大入試に考え過ぎて浪人になった。当時、浪人は珍しかった。井の頭線の「西永福」という郊外に、小さな予備校があったので、午前中を「外苑前」から通った。すでに髪をのばしていた。授業が終わると、いつも土橋康邦君と一緒に、渋谷迄、井の頭線で帰る。電車は、いつもガラガラだった。

或る日、電車が「一高前」を出た頃、前の席にいた若い男の人が立ち上がった。「ちょっと、その辞書を貸してください」と言う。「どうぞ」と言って、ブック・ベルトを外して、彼に渡した。彼はあちこち頁をめくり、首を傾けたりしていた。やがて戻ってくると、「どうも」と言って、辞書を差し出す。受け取ろうと思って、座ったまま右手を伸ばすと、いきなりギュッとその手を握り締めた！ 突然、蛇にでも噛まれたようで、ハッと思った。5秒か、1分か、カーッと became. 彼は力一杯指を開かせようとする。次に何をされるか、判らないのが怖い！ 神泉駅が近くなった頃には、もう何処にもいなかった。「進駐軍」が引き上げた後の東京には、知らない間に、とんでもない連中が、ぞくぞくと「移住」してきていたのだ！（あの時、土橋君は何も加勢してくれなかったじゃないか！）

大学生になった時、突然、年賀状を出すのを一切辞めたことがある。もちろん返事も書かない。簡単なもので、3年目には誰からも年賀状は来なくなった。『知覚しないものは、存在しない』と言っていれば済むことなので、生きてゆく上には少しも困らなかった。ところが、土橋君だけが、唯一人、ガンとして年賀状を送り続けて来た。とうとう根負けして、毎年、彼の所にな

け一枚の年賀状を書いた。

今の東京の電車には、痴漢がいるという。筆者に言わせれば、東京の電車には、「痴女」までがいた。痴漢は騒げば摘み出せるが、痴女相手では騒げない。ドイツ軍の猛烈な砲撃を浴びている、フランス・ベルダン要塞のごとく、只々、防衛線を堅く護って、じっと耐えるだけである。時間だけがこちらの味方である。ところが、東京には痴女などいないという。いつの間にか東京は、『知覚しないものは、存在しない』という、ドイツ観念論の信徒達で、溢れかえっているのだ！

戦争末期から敗戦にかけての東京では、とても気持ち良く暮らせた。『郷里には蔵の七つもあって、中には金の茶釜が唸っているような話』をしていた人達は、さっさと、その郷里に引き揚げた。後には、「疎開しろと言われたって、今更行く所などない」貧乏人ばかりが残って、遠慮のない立話をしあっていた。今でも覚えている最高の傑作は、「連合艦隊は、いったい、何処へ行っちゃったんでしょうねえ！」というのである。あと一步、“Under the Waves!”（波の下だ!）という事に思い至らなかった、「論理の甘さ」が悔やまれる。この反省があるから、筆者は、人に嫌われても、ギリギリと、「極論」を追い詰めずにはいられない性格となった。やがてアメリカに行ったとき、彼等が、この手の論理に、“Over Simplified Theory!”という美しい名前を付けて、ヤンヤと喜ぶことを知った! 「アンタみたいに、何もかも割り切ろうたって、日本じゃそうは行かないんだから!」と、懇願されようが、軽蔑されようが、もう遅い。これは戦争のせいだ!

東京の杉並区一帯は、いわゆる「軍人町」であった。戦況が不利になると、彼等の家には一早く、軍用トラックと兵隊が、夜になると乗り着けた。昨夜はあそこが今夜はここかと、タンスから火鉢までトラックで運び去った。空家ばかりになった住宅街に、ナパームをばら撒かれては、大火になるのは当たり前だ……『なにが帝都防衛だ! なにが陸軍だ! よくもノメノメと!』
.....

父が、戦中戦後を通じて数日しか東京を離れず、われわれが「3万も5万



図 1

1926（昭和元）年 10 月 17 日 卒業記念

左より 南部（沖縄にて戦死）

藤田（1987 年病死）

中嶋（中耳炎にて間もなく病死）の諸氏

も餓死する」と言われた，末期的な東京にあえて戻り，バラックで過ごしたのは，たまたま，報道の仕事を飯の種にしていたからである．父は、『文字と知識』を生計の資とする「職業を選んだ」のであって，「商品・武器・ハンコ」を選んだのではなかった．

「この仕事は一日も休めないのだ」と言って，当番に当たれば，元旦だろうと日曜だろうと出掛けて行った．焼け出された，5 月 25 日の夜も，運悪く当番だった．明くる日の昼頃，有楽町から歩いて帰ってきた父は，「あの原稿も焼けてしまったか！」とだけ言った．「あの原稿」とは，「世界食糧資源論」のことである．これはすでに本になっており，御用済みの原稿だった．

それを、床の間にうず高く積み上げていた。あれは、三田で母と同棲を始めた頃の、「思い出の品」であった。もちろん、かくいう筆者自身もまた、「思い出の品」である。

今日では、やたらと「新聞休刊日」がある。それを、「新聞少年を休めるため」などと『オタメゴカシ』を言う。「自分で責任をとる」「Business Honesty」を失った新聞は、もはや、『社会の木鐸：世人を教え、導く人』などではない。現在東京には、実に「変な連中」ばかりが、群がっているのだ！

何を隠そう、実は物理屋こそ、最も「変な連中」なのだ！ 最初に、「物理屋には変な連中がいる」と思ったのは、大学院の時だ。「君に厳しく追求されても、僕らの若い頃は、勉強する暇が無かったのだ」と言い出した。それは勿論判る。同情を感じながら、話を聞くと、あるフランス映画を「心の拠り所にして」、暗い映画館の中で、「暗い青春」を過ごしたという。その映画は、日本で最後に上映されたフランス映画である。その後は、「軍国主義一色」となり、フランス映画はついに戦後迄、一本も上映されたことはなかった。その曰く付きの「名画」は、まだ観てなかった。それで、かなり注意して機会を待ち、とうとう或る日、横浜まで出掛けた。椅子に座ると、ついに、白黒スタンダード・サイズの、雨だらけの「名画」が始まった。

話は、「バレエ学校の少女達と、教師の物語」であった。ひどく印象の薄い、退屈な映画だった。やがて、女生徒と男の教師とが、一緒にはレッスン出来ない関係になる。ある夜、男教師は学校を出て行くことになった。教師が、未練がましく、「ヒトコト、何か言ってくれ」という。すると少女が、“Toi!”（トワ！：あなたあー！）と、本当にヒトコト言った！ これには参った。しかし、かの「暗い青春の物理屋」は、ドイツ語しか判らなかった筈だから、「心の拠り所」がここであろう筈がない。映画は、だらだらと終わりに向かう。マリー・ベルが登場し、バレエの薄いスカートに透けた脚を挙げる。顔が大写しになる。形のいい唇が、“Travaillez bien!”（トラヴァイエ・ビアン！）と言う。字幕が、「勉強しなさい！」と、顔に重なって終わる。何だ下らない！と思った。

文科の大学生は、鉄砲を持たされて、戦場に行くことになった。鼻摘みの不良だった、井上の仙チャンも、明治大学から「出陣」することになった。急にオバチャン達の同情が集まり、神宮外苑の「出陣式」などを、「どうだった」と聞かれると、「雨と涙で、ぐちゃぐちゃだったよ」などと答えていた。やがて、送別会が開かれると、得意の「誰か故郷を想わざる」を歌い出した。しかし、ついに泣きだして、そのまま泣き崩れた。すると、部屋の隅で、地主の娘のカンチャンがワッと泣き出し、皆、たちまち「赤い糸」を知った。オバチャン達は慌てて二手に分かれ、車座になり、「壮行会」は総崩れとなった。仙チャンを囲んだ一同は、感極まって、「仙チャン！ 生きて帰っておいでっ！ ねっ！ ねっ！」と言って泣き伏した。

幸い、仙チャンは帰って来たという噂を聞いた。しかし、もう集まる家はなかった。知っての通り、身体が腐り果て、帰れなくなった人は数知れない。フランス女の脚を見て、「暗い青春を送った」物理屋達には、戦後も「勉強した」気配がない。帰って来なかったたくさんの生命の見返りに、「これで」と言って、机の上に出せる「業績」すらなかった。彼等は無能なのだ。その証拠には、「公務員（なんとか）法で、俺たちをクビに出来ない」と、公言していた。

だがついに、残念ながら、われわれ「ミディ・アプレゲール」の世代にも、「変な連中」が出現した。1991年9月8日（日）、ボブ・バックラックが20年振りに来日すると言ってきた。研究所勤めを辞め、半導体企業の“Director”に変身していた。二人だけでもいいが、三人いれば話題も広がる。それで、友人の大学教授を誘い、センチュリー・ハイアットの一室に、12:30 p.m. に集まった。ボブは、新宿 JR の、土手を突き抜ける細いトンネルを、“Worm Hole”と言って喜んだ。「ニューヨークだったら、オレだってこんな所は避ける。ソレを見ろ！ 女の子が一人で入って行く！」と言って、感激していた。外に出る度に、“East Side!（東口）”、“West Side!（西口）”と言って、両手を上に開いて喜んだ。

やがて和食レストランに案内すると、「とてもいい。I'll come back!（また

来たい)」と言って、喜んでくれた。物理の話になり、ボブはすぐにカオスの話を始めた。大学教授に向かって、まず、「カオスは物理だと思うか」と質問した。実にいい質問だ。しかし、昨今の大学教授など、自分の専門外のことは何も判らない。そのくせ、ぐずぐずと勿体ぶったことを並べる。ボブは、堪りかねて“I think it's physics.”と自分の考えを述べた。これは、「可積分・非可積分」をめぐる基礎の問題で、外国ではすでに騒いでいた。自然に、会話から大学教授が外れていった。やがてボブは、教授を引き戻すために、“Hiizu is a vanguard, you know!”と、そつのないお世辞を、教授に向かって述べた。平均的、会話のエチケットである。まず教授が、「そうだ」くらいに軽く受けると、筆者が「でも、君の最近のあの仕事は……」と言うようなことを述べて、ボールを「彼のコートに入れる」手筈である。ところが彼は、みるみる不機嫌になった。「アア、イヤダ!」と思った。それっきり、彼には二度と会わないことにした。（*：Appendix 参照）

ベペ・ル・モコの中で、ジャン・ギャバンがギャビーとダンスをしながら、耳元でささやく：“Comment est-il?”（オメッチのパトロンは、どんな男だい？）女は簡単に答える。“Jaloux!”（妬み屋!）。女を囲うのにも、物理を続けるのにも、能力が要る。能力は、努力や財力でも維持することができる。しかし、メジャー・リーグの監督が、いみじくも言ったように、「努力は才能に勝てない」。競争社会に生きていれば、野球の監督でサエ、こんなことは知っている。階層社会に生きていては、大学教授でサエ、こんなことも知らない。無能な彼等は、いつだって同じ蟻地獄に落ちる。穴の底には、「嫉妬」という怖い虫が、大きな罅を開いて待っている。東京では、「変な連中」が、物理の教授になる所まで、事態は進んでいたのだ!

国際化が進むと、東京は更におかしくなった。ドイツ系の米国教授が来日した時、二人だけで、魚河岸の場末の寿司屋に行った。何が気に入ったのか、彼は止まり木の上で、またここに来たいという。その「また」は、かなり早く実現した。今度は、大倉熈さんをはじめ五人が集まり、狭い畳の上で「イオン結晶物理」の前途を祝って、ひしめいた。

銀座東急ホテルの前で別れる時、右手を差し出すと、手首を掴んで手繰り寄せ、そのまま抱きかかえてきた。左の頬に、お別れのキスをしたらしい。アメリカで、そんな事をされたことは、一度もない。当惑していると、ますます攻めてくる。左眼のコーナーに、離れて笑っている大倉さんの顔がチラと見えると、金色の光が視野の中を、ゆっくりと左に滑っていった。笑って別れたが、畜生アイツメ！ 今度来たら、タダジャオカンゾ！ と思った。幸いそれ切り来ない。あれは、「物理屋仲間の、インターナショナルな友情の表現」なんかじゃない。ヤバン人め！ と思った。

ストラスブールからは、ミシエルが来る。“Bien venu au Japon!”と言ってやると、“Merci!”と言う。彼は、レストランに入ると、必ず、一皿ずつの品を、二人で互いに分け合って食べようと言いだす。これがイヤだ！ これは食べたくない、それは嫌いだと、何とか理屈を付けて防戦する。そのうちに、彼と同じ皿を注文すればいい、ということに気が付いて、この問題は解決した。人に聞いたところでは、これは「フランス式、親密さの表現法」なのだと言った。そう言えば、自分の箸を使って、やたらと料理を挟んで人に勧める国もある。衛生観念だけで、判断してはいけないのかもしれない。

フランス人との別れは愉しめる。「ちょっと仙台に行ってくる」などという時は、“A bientôt”（アビアント：じゃまたな）で済む。気持ちも軽い。いよいよ国に帰る、となるとデリカシーが要る。次回が期待出来れば、“A la prochaine (fois)”（ア・ラプロシエヌ：またな）と言い、“la”という「定冠詞」が出てくる。次はいつ、という当てのない時の「また」は、“A une prochaine”と、「不定冠詞」“une”に変わる。この時程、「透明な文法」の非情を感じる時はない。最後には、“Au revoir!”という、サッと新宿のホームで雑踏に消えた。あれ！ あいつ確か、revoirと言ったな！ と暫らく呆然とした。確かに、退職して出国するチャンスもなくなったのか、それ切り一度も来ない。

ミシエルは、黙って人の論文を二つ、フランス語に翻訳してくれた。ストラスブールのかんりの学生達に配ったと言って、コピーを送ってきた。後で

述べるが、3年生の時に、浅間の「東大火山観測所長」の水上武教授が、「君は将来、是非フランス語で論文を書き給え！」と激励してきた。これで、あの時の責を果たしたという事にしようと思う。これがミシェルの、「物理屋仲間の、インターナショナルな友情の表現」なのだろう。

フレッドとは、最後に分子研の玄関の、ガラス戸の所で別れた。フレッドはしばらく分子研に滞在する。筆者は東京に戻る。彼が玄関迄送ってくるなどということは、アメリカでは一度もなかった。お互いに判っている。多分これが最後だ。“IF, this is the last,……”と挨拶を始める。しかし、“the”の軽いのが残念だ。“So long!”と最後に言う。“OK!”と言った。So longは軍隊用語で、アメリカの兵隊は、「死地」になど赴かないから、「また戻る！」というニュアンスがある。それで、“OK!”となる。いかにもフレッドらしく、悪くなかった！

昔、ユタの物理教室で“So long!”とやると、栗色の髪の子が、パッと二本指の敬礼を返してきた。さながら「ベルばら」の趣きがあった。これも、もちろん悪くなかった！

エド・ロウは、いつも眼をつぶって別れる。筑波のホテルの前でその時が来た。彼はいつも、“Well?”としか言わない。いつでも、人に挨拶を言わせる。それで、こちらは立ち止まると、足下を指してキツク言う：“This is the SPOT, to say good-bye!”エド・ロウが無言のまま、何となく半歩近づく。こちらは、それとなく半歩下がる。彼の閉じた眼の、長いまつげを眺めながら、黙って別れる。実に、難しい奴だ！しかし、これも悪くはない！

1976年6月10, 11, 12日、大阪大学の川村肇先生に誘われて、理学部・物理教室で、「ウイスコンシンの話」をした。川村先生は、真っ黄色な車を運転して出迎えに来られた。ハイウエーに出ると、たちまち追越しをかけた。「先生やりますねえ！」という、「車の性能が違うんだから、仕方がない！」と言われた。そうだ！イタリアのハイウエーでは、アルファ・ロメオはあらゆる車を脇にどかして、ひとりで、一直線につっ走っていた。性能重視という考え方こそ合理的だ。

講演は二度あった。「学生さん相手」の方は碎けた話をした。まず、イリノイ・ウイスコンシンの「春・夏・秋・冬」を紹介した。春は、ウイスコンシンの枯草の平原、夏は、エルムの緑濃い木陰、秋は、アーバナの紅葉、冬は、イリノイのアイス・ストームである。アーバナのアパート近く、「グリーン・マッカローフの交差点」で撮った、真っ黄色な街路樹の前に立つ、「ワイフと子供」のスライドを映すと、大勢の学生がピイピイと口笛を吹いた！日本の学生もずいぶん変った。アメリカでさえ、こんなことはなかった。千里中央で、川村先生に晩餐をご馳走になった。「ここは、大阪の有産・無知識階級が食事をする所です」と、おっしゃった。

何時の頃からか、「世の中は、バカとリコウで成り立っている」という、『危険な思想』を持つようになった。中国の昔の人が、「上智と下愚は移らず」と言った。「上智、つまり本当によく物の判っている人と、下愚、つまり何も判っていない人とは、意見・信念を変えないものだ」という意味に教わった。昨今では、「上知と下愚とは、交換できない」と訳すようだ。どちらでも良い。今、このステートメントを考えてみると、このオジサンは、やはり「古い人」になったと痛感する。あるいは、「21世紀はやはり新しい」と言っても良い。あるいは、もっと穏やかに、「時代は進歩したのだ」と言っても良いし、更にもっと穏やかに、このオジサンも、「ここ迄の未来は、予測出来なかったのだ」と言っても良い。

21世紀目前の、日本の現実には、すでに筆者が「資料保存と現代物理学」の中で述べたように、「バカはいつもバカで、リコウはいつもリコウならいいんですが、時として、バカがリコウになったり、リコウがバカになったりするからややこしい」のだ。

21世紀目前の、日本の現実の、「世の中は、バカとリコウで成り立っている」。そして「その上に、オリコウサンという連中が乗っかっている！」。しかも「バカとリコウは移る！しかし、オリコウサンは『移らず』！」なのである。この現実を、明らさまに、具体的に、述べることこそ、『本当に危険』なのであり、命を狙われても仕方がない！

「努力しなさい。勉強しなさい。人格を磨きなさい。向上すれば、それだけ自分の視野と可能性が開けます」。こんなことを、今の学生に向かって説く連中は、ベテランである。彼等が言いたいのは、本当は唯一つ。小さな頂上にやっとたどり着いた、『この人を見よ』と、いうだけのことなのである。

昔、我々が懸命に戦闘機のクランクシャフトを削っていた時、アメリカでは、こういう報告がなされていた：『確かに航空機は多い。おそらく1年前より増えている。しかし、中隊長はおろか、小隊長すらいない。急造の代替要員は、技量も能力も戦闘の知識もなく、われわれの敵ではない』。今日また、同じ類の報告が、アメリカのどこかでなされているであろう：『確かに人数は増えている。しかし、急造の東京大学の大学院・ポスドク・教授連中は、技量も能力も国際協同研究の知識もなく、われわれの敵ではない』。

「努力したって、勉強したって、一步一步高みに登ったって、われわれが在校中に出来ることなど、タカが知れている。また社会に出れば、居座っている連中が、動こうとしない」。こんなことは、“Student Apathy”に陥っている現代の学生は、皆、良く知っている。しかし、実は、彼等は知らされていないのだ：「本当は、努力は才能に勝てないのだ。しかも、『一つも才能のない人間など、いないのだ』。だから、諸君は、自分の才能を探せ！ 昔の教師と学友は、我々の才能が何処にあるかを教えてくれた。今の教師は、諸君等に偏差値しか教えないだろう。学友は、互いにライバルにされている。では、諸君は自分で才能を発見する他はない。4年間は短い。ボヤボヤするな！」。これが、『本当の危険思想』なのである。何故なら、もし皆が信じ込めば、システムが崩壊する！

「ミディ・アプレゲール」の命など、手間をかけて狙わなくても、統計が冷酷に示している。65歳以上では、4/5が女性である。父が、83歳でガンで死んだときは、食事のスプーンが重いと言いついた。スプーンを取替えてやると、看護婦が「具合はどうですか」と聞いた。父は、「ここを死地と心得た」と言った。看護婦は、慌てて「ダメですよ、フジタさん、そんなことを言っては！ 治って、退院するんですよ！」と空々しいことを言った。頭

が枕から上げられなくなった頃の朝は、どんな気持ちでしたものか。声を出す力もなくなった頃は、「文字と知識」を職業に選んだ人間は、何を考えたのだろう。

日本の医療制度・施設は、またしても、ただアメリカの後を追っているだけに過ぎない。アメリカと同じように、「日歩何厘で日ゼニの入る人間」と、「巨額な遺産を廻って、相続・配分に時間のかかる人間」のために、必要なだけである。「人命は、老弱男女・貧富貴賤・の別なく尊い」と教育しておかなければ、医師は勝手に患者を選び、貧富の差を付けて「殺す」。彼等の“Intellectual Honesty”など、とうの昔に地に墜ちている。われわれ貧乏人は、何処で・何時・死のうと、「並木のこやし」・「当世湯燗場物語」であることに、昔から変りなどない。

東京杉並の貧乏暮らしの中でも、母の「金に突つかれる」性格に変りはなかった。今思っても「素晴らしい」、銀色の太い十文字柄の、派手な和服に、金色の刺繍の入った帯を締める。それで、ふらりと小学校の「授業参観」に来る。母が帰ると、隣の席の宮川清志君が、「君のお母さんは、綺麗だなあ」と言った。金が有るうちは使い、無くなれば、スイスの腕時計を持って、平気で質屋に行く。今、筆者が使っている、女物の水晶のハンコなど、質屋以外に、母が使っているのを見た記憶がない。「親類の誰それは、夜明けに、部屋が明るくなってきて、畳の目が見えるようになると、嬉しくって仕方がないんだって！ 日歩何厘だか的大金が、また入るからよ！ 大金持ちというのは、あたし達とは全然違ったことを考えているのよ！」と言った。

「郷里には蔵の七つもあって」、米騒動で蔵が破られる。父は、「神戸の貧民窟」のセツルメントに入った。ついに捕まって留置場に放り込まれる。兄が迎えにくる。すでに、両手の指は、みなひどい皮膚病にかかっていた。硫黄温泉の長逗留でやっと治す。やがて、博多湾の能古島（このしま）の対岸の海浜で、母と二人で一夏を過す。

『或る時、九州で物理学会があった。「此処」と信じる海浜に、一人で小半日座り込んで、ぼんやりと、カモメと能古島を眺めて、夕方迄過ごした。

「岸にばかりいて、どうしても、傍にきて、一緒に海に入ろうとしないんだ」と話していた、父のコメントが引っ掛かり、波打ち際に、母の白い裸形がチラチラして悩んだ」。

母一人を置いて、また郷里へ無心に。母は一人で、博多ドンタクのつまらぬ見物。大阪箕面の、何たらホテルでのランデブー・大きなお腹を抱えての入籍の交渉。「何処の馬の骨か」の騒ぎ。三田のキャンパスには、「夕方、美人が乳母車を押して散歩に現われる」話。外航船が横浜に入ると、「高級船員」が、「あれは妹だ」といくら言っても消えない「艶話」。確かに、戸田の緒明の二女が嫁いで来た家の門前には、「私設交番」があった。

「平塚らいてうが、お前を抱いてくれた」と聞かされても、文芸作品一つなく、ましてや、ブルーストッキングでもない。獄中から、鈴木茂三郎の立候補挨拶が来る。翼賛選挙会場の小学校の門前では、父は「西郷隆盛と書いて来てやった！」と言う。戦後、鈴木茂三郎の選挙事務所に、いそいそと面会に行く母。極め付けは、四万人が伏せて、「地上 15 センチしかない空気」を吸って過ごした一夜の物語。朝、「腰の下まで届く程の、長い髪」を下げて立ち上がった時、2 千人しか、立って歩いていなかった被服廠の庭。銀行が潰れ、今日からは一文なし。et cetera! まるで、正倉院のボロクズ糸の塊のように、いくらいじって見ても、模様など浮かび上がらない。バカなのか、リコウなのか、オカシナ・オカシナ・二人だ! そんな二人の「思い出の品」が、眉まで白くなった今頃、このボロボロの命を惜しむと思うか?

Oh! Don't Make Me Laugh!

1969 年 11 月 27 日 (水)、「後片付けもそこそこに、逃げるようにイリノイに向かって南下した」。猛烈なストームが、ロッキーに沿って下ってくる。「帰る!」と言うと、チャーリーは、“HUM!” と言って、人の顔をにらみ付けた。シカゴのインターステート 94 は、悪名高い“Stranded Hi-Way”である。ストームが来れば、ミシガンの水がたっぷり雪になり、94 に降る。一台がスリップして事故を起こすと、後続が次々につかえる。翌朝の新聞には、決まって、“STRANDED!” (立ち往生) という大きな見出しで、雪に埋まっ

たハイウエーの空中写真が出る。たくさんの、「塚」のような盛り上がりがある。その下には、ガソリンの最後一滴までを暖房に使い果たし、蚕が蛹になったように固くなって、人が倒れている。チャーリーは、「危険だと思ったら、BELOIT のジャンクションで、90 を降りろ」と言う。ジャンクションのすぐ外に、モートルがあると言った。チャーリーは、運転席に頭をつっ込んで、“OK? OK?” と BELOIT の念を押す。エド・ロウはいなかった。エド・ロウの秘書の、ローズマリー・メームのオバチャンまでが、ミニスカートの足踏みをしながら見送った。

ハイウエーに出ると、事態は予想以上に悪かった。メリケン粉のような乾いた雪が、ブワッと車を包む。何も見えない。視界が明けると、粉のような雪が路面を走り廻っている。時々真っ白になる視界の中に、前に行く車の赤いテールランプだけを頼りに、ただひたすらに走る。ついに BELOIT を過ぎた。とうとう “You Are Leaving Wisconsin!” という、州境いの看板が出た。“Welcome to Illinois!” という看板も出た。すると、あれあれっと思う間に、雪が止んだ！

1969 年 12 月 6 日（金），“Party of One” の夕食をハーヴァーソンで済ませた。外に出ると、小雨が降っていた。何も考えずに走り出した。急に雨が強くなり、マクファーランドに入る頃には、ワイパーも間に合わなくなった。最後の坂を登る時、おかしいなと思った。そのまま坂を下り、十字路に差しかかる。エド・ロウの湖畔の家には右へ、PSL には左へである。すると、車にブレーキがかかったように、遅くなり、ついに動かなくなった。すぐに、車輪が空回りしているのに気が付いた。そんな！ 雨なのに！ という訳で、外に出てみると驚いた！ “Freezing Rain” なのである！

“Freezing Rain” は、土地の人は “Ice Storm” という。強烈な寒冷前線が低く侵入すると、上空よりも地上の方が気温が下がる。降ってきた雨が、地上で凍り着く。氷の重みで樹の枝が折れ、道をふさぐ。車が停まると、タイヤが路面に凍結する。車には更に氷が乗る。その後たいていは雪に変わり、気温が猛烈に下がる。朝になると、一面の氷と雪がシャンデリアのように、キ

ラキラと朝日に輝く。だが一步間違えば、大勢の人が死ぬ。

あと1キロ足らずでPSLであるが、急な坂が滑って、とても歩いては登れない。弱ったと思っている間に、タイヤが路面に凍り付いた。“STRANDED”という、明日の新聞がチラついた。しかし、ハイウエーじゃないんだから、誰か気が付けてくれるかもしれない。廻りを見ると、10米程先の暗い路上に、一台停まっている。すると、暗い車のドアが開き、一人が降りた。ゆるい、滑る道をペンギンのようにヨチヨチと歩いてくる。最後の一步をドサッと人に預けて、しがみ付いた。“I'll join your party!”という声は、なんと女の子であった！ ウイスコンシン大学の、学生程の年齢好に見える。助手席のドアを開けてやると、転がるように中に入った。

バックミラーには、更に大変な事態が映った。道の路肩の下の暗闇に、車が転落して、吹き溜まりの雪の中に突き刺さっている。ヘッドライトが点いたままで、雪の下に二つの光の輪が明るい。追突しそうになり、ブレーキを踏んで、道の下に転落したのだろう。二人の影が車から這い出し、難儀の末に道に上がった。ヨチヨチと歩いてくると、物も言わずに後の座席に転がり込んだ。年の頃40代はじめ、身なりの良い中年男女の一组である。金曜日ということなので、パーティに行くのか、“Saturday-Couple”なのか、それは判らない。

女性の方は、「グチ・グチ・メソ・メソ」と、引っ切りなしの涙声で、男の腕の中で何かしゃべっている。少々うるさい。やがて、雨が急に物凄くなった。バタバタと天井の音までする。フロント・ガラスには滝のように水が流れる。これで本格的に凍りついて、動けなくなり、やがて雪に変わって、朝までには蛹になるのかと思った。不意に、1キロ米程先に、紅色のトーチランプが点いた。すぐに、4つ・6つと増えると、小高い丘の上に一列に並んで燃えだした。とうとう、マディソンからハイウエー・パトロールがやって来て、ストップ・ラインを引いたのだ。その綺麗な紅色の光を見ると、あそこが生と死を分ける一線かと思った。

女子学生は、時々「グス・グス」と鼻を鳴らす。後の席の「メソ・メソ」

は続く。こちらは「考え事」で忙しい。朝になれば、エド・ロウは、「理解できないコンビネーションだ」と言うだろう。しかし、目頭くらい押さえるだろう。母は嘆くだろう。幸い家族は帰してある。「研チャンに、研チャンに」といって、日本橋三越の地下売場で、子供のズボンや上着の特売品を、山のように買ってくる。衣類の山を、かき回しているのが楽しいのだ。毎週一度、多いときは二度も、三鷹の都営住宅の、シミだらけな壁の前に喜んで座る。母はあれで済む。

日本書紀には、大津のみこ（皇子）の話に、凄まじい文章が出ている：「みこ・大津を、おさたの家にみまからしむ。時に年、はたち・あまり四つなり。みめ・ひめみこ（妃皇女：天智皇女）やまのへ（山辺）、髪を降だして、素足にして走り行き、ともに死ぬ。見る人、みな嘆く」である。「幸いにして」というべきか、「残念ながら」というべきか、「こういう人はいなかったなあ」と思いながら、一列の紅色のトーチランプの焰を眺めていた。雨は止んだようだが、やがて、雪か、猛烈な寒さが来るだろうと覚悟していた。

しかし、もし誰かが来た時に、ドアが凍結していて、出られないというのは詰まらないと思い、時々ドアを細目に押し開いてみた。トーチランプが何回か焚き直された頃、ドアを少し押し開くとオヤと思った。空気が生暖かいのである。不思議に思って外に出てみると、驚いた。「熱風」という程の、南風が吹きまくっている！ 氷が解けて、道には水がジャージャーと流れている。アメリカにいと、いつも、「チャンス！」という言葉で、これ程痛感する国も他にあるまいと思った。僅かのスキをついて、形勢を一気に逆転させるのである。道はもう簡単に歩ける！ タイヤも、じきに動かせるだろう。気配を察して、女子学生が出てきた。“Party is OVER!”と言うと、“YEAH! Thank you!”と言って、スタスタと坂を歩き出した。幼いのに、しっかりしていた。

やがて、ハイウエー・パトロールが、赤ランプを点滅しながらやって来た。中年の二人をパトロールに渡すと、車を出した。急な坂を簡単に登り、左に曲がると、直ぐに PSL の実験室に戻った。重い扉を開けると、ロータリー

とモレキュラー・ポンプがまだ回っていた。その音を聞くと、さっきのことは、「夢だったのだ!」という気がした。

なぜ、この話をしなかったか？ それは、イヤだったからだ。チャーリー、エド・ロウ、フレッドなどが来日すると、毎回のように、“Let's take back Hiizu!”と言って話題にしてくれた。それやこれやを、うっかり話せば、そんな危険な所には、もう行くなとなりかねない。アメリカの自然は、日本（東京）より遥かに厳しい。（Je comprends!）

最近偶然、「物性」Vol. 13, No. 2, (1972) に、佐川敬さんの、「ハンブルグ DESY 滞在記」というのを見付けた。1972 年は RCA 基研で測定装置の「近代化」に忙しく、この記事を読んだ記憶がない。実に愉しそうだ。だが、「当時世界の主役は、INSSOR と DESY であり」?!

Oh! Don't Make Me Laugh!

§Ⅱ-2 Slow Burn

高3になり、大学の受験が近づくと、鳥山榛名という国語の先生が、「お前は文科に行け」と言った。考えてみたが、やはり理科にしたいと思った。父は、「エンジニアにならんか」と言った。それも面白そうだが、やはり『理学』にしようと思った。その実、理学の概念は何もなかった。皆が受けるというので、「オレも」という気持ちで本郷に行った。建物の中が、実に汚いので驚いた。まず、「ガッカリ」という気がした。テストになると、「物理」の二題の問題で完全に行き詰まった。

一題は、「電磁気」の問題である。鉄の棒にコイルが巻いてある。その棒の右端に、アルミ箔の輪が糸で釣り下げられていて、棒に刺さっている。コイルのスイッチを、ON・OFF する。その度に、アルミ箔の輪が、「出たり・引き込まれり・また戻ったり」と、いろいろの組合せの答が書いてある。どれかを選べという。もちろん、「レンツの法則」の問題だと言うことは、すぐ判った。「レンツの法則について述べよ」というのなら、当時でも 500 字

位は書けたかもしれない。

訳の判らない電池・訳の判らない針金、それでどんな磁石になるか。本当は、アルミ箔はねじれるのかも知れない。「出るだの、戻るだの」と、「そんなこと、やって見なければ判らない」と思った。そう思い出すと、どれにも自信がなくなった。事実、入試が終わると、なるべく問題の条件に近い材料を、かなり苦勞して集めた。そして、「実験装置」を、バラックの書齋の机の上に組み立てた。「サテ」と思ってスイッチを入れたが、箔の輪はピクリともしなかったので、むしろ非常に驚いた！

もう一題は、「光学」の問題だった。薄い凸レンズを真ん中で、二つに横に切る。半分づつになったものを、何ミリかずつ上下に離す。この時の像を求めよという。「サスガ！ この学校は、素晴らしい問題を出す！」と感嘆した。

凸レンズの焦点とは、光源から出た光が、まずレンズの前面に当たり、各点で「屈折の法則」によって曲がり、レンズの中に入る。それが直進して、反対側の表面に來ると、もう一度「屈折の法則」を満足しながら、こんどはレンズ中から外に出る。それらの光線が、全て一点に集まるのは、レンズが球面レンズで、しかも、近軸光線の場合である、と教わった。今の問題は、半分の球面を上下にずらした。従って、光軸上では、もはや「球面関数」ではない。更に、「横にはずらしてない」から、上下と左右とでは条件が違う。この時、「屈折の法則」により、光は何処に集まるか？ サア判らない。しかも、僅かの隙間が上下の間に出来た。「ここを抜ける光はどこへ行るか」？「サスガ！ 素晴らしい！」と思った。結局、「サスガ」と「出たり・入ったり」の問題が、どちらも決着の付かぬうちに時間が來た。とうてい、手に負える問題ではないと思い、二題とも白紙で出した。

試験の最終日には、「こういう素晴らしい学校なら、来年は是非入学して、勉強したい」と思って退場した。今思っても、サバサバしていた。発表も見に行かなかった。母が、「でも行ってみたら」と言ったが、「ダメなんだよ、あれは」で、行かなかった。物理が二題も白紙で、合格する筈がないと確信

していた。二期試験は、出来て当たり前という問題で、この発表も見に行きたくはなかった。やがて入学手続きの期限が迫り、仕方なく、「どこにも行かないで、浪人する」と母に告げた。全く予期していなかったらしく、大いに慌てて、すぐに父の職場に飛んで行った。結局、何の話し合いもしないままに、浪人になった。

当時の高校には、特異な友達が大勢いた。「数学」には、鈴木一正君と五味淵涼一君がいた。五味淵君は、休み時間でも一人でツクネンと席に座っている。どんな質問も嫌がらず、淡々と教えてくれる。「微分・積分学」では、横倉照夫君がいた。高2の時には、すでに渡辺孫一郎の「初等微積分学」が、バラバラになる程愛読していた。「風呂に入る時間も惜しい」と言って、風呂の中でまで、渡辺孫一郎を読んでいた。時々、「フジタ！ これを知っているか！」と攻勢をかけてくる。それで、こちらも渡辺孫一郎を買い込んだ。それでも油断がならなかった。横倉君は、一緒に一年遅れて駒場に入ったが、とうとう自殺してしまった。学部が分かれ、付き合いが途絶えていた。或る夜、ふと思い出して、何気なく葉書を一枚送った。葬儀に駆け付けると、まさに淋しい出棺をするところだった。端正なお父さんが、直ぐに寄って来て、「フジタさんですね！ 頂いたお葉書を、最後まで机の上に立てて、喜んでいました！」と挨拶した。棺の扉を開けると、すぐ下に彼の顔があった。……『アッチャン！ 君をこんな所に迄追い詰めた、「奴等」の無能を、白日のもとに引きずり出し、必ず君の仇を撃ってやるからな！』……霊柩車が動きだすと、お父さんが思わず列を離れ、二、三步後を追った。横倉君の不幸は、「奴等の無能」が見抜けなかったことだ。まだ3年生だった。

「英語」は、清本晴雄君と末常尚志君が桁外れだった。彼等は、高2の時には、もう「辞書はいらない」と見えた。清本君は、選択のフランス語も上達し、時々ふらっと遊びに来ては、「ランボオ・ランボオ！」と、勝手に詩論を展開して帰った。大変親切で、後年、育英会が筆者の奨学金を打ち切ってきた時にも、「ソナモノ、イラネエヨ！ 心配するな！」と言って、直ぐに亀戸（墨田区吾妻町）の中学生の、家庭教師のアルバイトを持って来て

くれた。印刷インキ製造工場の社長の長男で、「剛（タケチャン）」といった。「今度、邸を設計する宿題が出ました」と言う。「広さは？」と聞くと、「シャツボ！（百坪）」と返事をするような子であった。いい月謝をくれた上に、「お家が遠いから、お腹がすくでしょう」と言っていて、終わると、いつも立派なエビの天井を出した。

育英会というのは、訳の分からない団体だ。大学３年の時、突然、「日比谷公会堂に來い」といつてきた。もちろん好く知っている場所だ。土橋君のお姉さんが、砂原美智子のお弟子さんだったので、その「発表会」さえあった所だ。それが、裏というか表というか、公会堂の反対側に、そんな不粹な連中が、住み付いているとは知らなかった。オジイサンが「君のこのままの成績では、奨学金は打切りになるが」と言う。「このままの成績？ 私、自分の成績、見たことないんですけど」と言おうとして止めた。くれると言うのならともかく、貸すだけで、つべこべ言うことがあるかと思った。何をどう勉強しようと、こっちの勝手だ。お前の指図なんか受けるか、と思った。「そうですか」と言うのと終わりになった。

不思議なのは、大学院になると、更に高額の奨学金を貸した。「このままの成績」は、どうなったのかと思ったが、面倒臭いので放っておいた。しかし、友人の中に「貰えない」のがいた。理由のある「選別」とも思えなかった。ので、皆で出し合って、「ワリカン」にした。すると、意外なことに、永田武・助教授が怒った。「教授会の決定を、無視する気か」という。教授会と育英会との関係が、いまいち分からない。結局、「無視した」。しかも後年、博士課程に行くと、もっと増額してきた。この時は、すでに「学生結婚」をしていた。「戸籍筆頭者で、しかも妻の扶養家族」という状態だったので、経済的には、無理に借りなくてもよかった。

その上に、「横井さん」という親切な友人が、「君なら任せられるから」という、判ったような、判らないような理由を述べて、荻窪の中学生の家庭教師のアルバイトを、世話してきた。言われるままに、応接間の大きなソファーに座ると、今度は奥さんが「横井さんのご紹介なら、お任せできますから」

と言った。横井さんは、てっきり「理論の同級生」と思っていたが、今見ると同級生名簿にない。これは、大学院の博士課程ともなると、上級生・下級生・外から来た人が、皆、入り混っているのです、誰も身分など気にしないからである。しかも、それっきり横井さんには会っていない。横井さんの好意は、今思っても不思議だし、合い済みぬ気がする。

一方次第に、その中学生は、東大医学部付属病院の、上田内科の、上田教授の息子と判ってきた。「上田・沖中・（誰とか）と、上・中・下で、3階・2階・1階に勢力を分けている」と、中学生が自分から話した。「それがどうした」と思っていた。夜遅くなると、門から玄関先まで、15米程もある真っ暗な庭の、樺並木の下で、帰宅した上田教授と、時々擦れ違う。「先生、先生、これ差し上げます」と言って、手探りで箱を手渡して来る。それを友人の客席に出すと、「フジタの奴、凄げーハムを食ってるな!」という。ついに、物性研に勤めるから、と言って、お暇を貰うと、「最後の晩餐」程のテーブルがないと、並べ切れないような、瀬戸の洋食器のフルセットが、日本橋の三越から届いた。

要するに、育英会の奨学金制度というものは、ロクに働こうともせず、その上に、大した額でもないのに、「返せないから、国立大学に勤める他はない」という、「おりこうさん」の逃げ口上に使われているだけだ。いやむしろ、そうやって、学生の根性をコントロールするのが、本来の目的なのだろう。しかし現在では、学生にはその意識さえなく、殆どが遊興費に使われ、ただ一気飲みのゲームを流行らせているだけだ……と思っていた。だが或る日、ついにハッキリした! そこには、『かれらの称賛は、一種の出しゃばりである』（ニーチェ）と書いてあった!

やがて、旺文社の模範解答集が出た。そこには、意外なことが書いてあった。まずスイッチ ON・OFFの話は、「事実上動かない」のだから、「聞く耳持たぬ」と思った。こんな問題が、来年は出ないことを希望するだけだった。「サスガ!」の問題は、何も考えずに、形式的に幾何光学の作図をすればいいのだ、という。「そんな筈はない。これは受験雑誌だからだ」ということで、

大学に対する「尊敬の気持ち」には、変わりはない。しかし一方、「その程度」の解答をすればいい、ということも判ってきた。予備校には、横倉君も林春彦君もいた。高校と大差ない気分だった。ただ、女子学生の長髪の頭が $1/4$ 程混ざっているのだけが、物珍しかった。

「物理が手薄だ」ということで、「聴講料」を別に納めて、「選択科目」を聞いた。講師の先生は、「深窓のお嬢様を青年にしたような」、整った、物静かな、若い先生だった。優しい眼に銀ぶちの眼鏡をかけ、形の好い唇の小さな声で、気恥ずかしそうな講義が進んだ。この歳になるまで、洋の東西を問わず、あれほど、「品のいい物理屋」を見たことがない。しかも、内容は立派だった。「八木アンテナの動作原理」・「波の伝播速度が、波長による場合」・つまり、「波長分散のある場合」の講義など、聞いたこともない話が淡々と進んだ。聴講生は、15 人程で、一体これで幾らの収入になるのだろうと、いつも気になった。事件と言えば、井の頭線で、エッチなオニイサンに会ったくらいで、平穏な日々が続いた。

二度目の入試の後では、落ちた気がしなかった。ただ、数学の一問だけが、何かのはずみで、三次方程式の根を求めることになった。どうせ、「その程度」の出題だろうから、「因数分解出来るに決まっている」と思った。それが、どうも求まらない。「マサカ」とは思ったが、時間が充分あるので、「カルダンの公式」から求めることにした。シワチャンに教わった通り、まず座標を動かし、つぎに二次方程式の根の公式を使い、見慣れた複素数の根の公式にたどりついた。しかし、いざ数値を入れてみると、スッキリしない。見直すのも面倒だと思っている間に、時間になった。会場を出ると、直ぐに林君に会った。「三次式はどうなった？」と聞くと、「因数分解出来たサ！」と言った。「ホントカ！」と言ったが、今更聞いても始まらぬので、すぐに別れた。

発表の日が近づくと、あの学校は一高時代の伝統で、夜中の 0 時 00 分に合格者名簿を、正門前に張りだすと聞いた。この話を家ですると、父が一緒に行きたいと言い出した。真っ暗な夜道を二人で歩いて、正門に近づくと、確かに、数人の寮生がローソクの火を揺らしながら、合格者名簿を見ていた。

「アッタよ」と言って、懐中電灯の明かりで父に見せた。真っ暗な道を、100米程も渋谷の方に帰りかけると、父は「もう一度見ていこう」と言って、掲示板の方へ戻った。幸い、名前はまだ消えずにあった。暗い道を歩いて、千駄ヶ谷迄帰ったが、もう、「何か、ひどく詰まらぬこと」のような気がし始めていた。

事実、学校は詰まらぬ所だった。寮の食堂の天井は、飛行機の格納庫のように高く、汚く、殺風景であった。アルマイトの食器は、正田飛行機で使っていた食器と、大差なかった。「お茶」とは名ばかりの、「白湯」が大きなヤカンから出てきた。「伝統を誇る」はずの、時計台本館の教室は、土埃だらけで、薄暗い。教室の鉄の窓枠は半ば腐り果て、窓ガラスは汚れ果てていた。一高時代の講堂を改造した「大教室」も、或いは新しく建てた木造平屋建ての「教室」も、8人掛けの木のベンチが詰まっているだけで、教師の声など、前の数列にしか聞こえない。

教師達は、誰も、殆ど教える気力を持っていなかった。予備校の先生の方がマシで、面白かった。新制大学になり、「バカどもに、こんなに大勢来られては、とてもやってられない!」という態度が、透けて見えた。要するに、物心両面にわたって、「学園の荒廃」は眼を覆わんばかりで、学生にとって、「楽しい所」など何処にもなかった。どこに行っても「バカ扱い」が感じられ、「人間扱いされている」と感じたことなど、一度もなかった。

語学の時間ばかりが、やたらとあった。殊に、あるドイツ語教師の一言が、最初からカチンときた。教科書の第一頁にカール・プッセの詩があった。辞書をひかなくても、有名な「山のあなたの空遠く」と読めた。教師は、開口一番、「ドイツ語は、フランス語のように、口先だけでアー・ペー・セーなどとやってはいかん。胸に深く息を吸って、腹の底から大きな声を出せ!」と言って、『フランス文化に対する、あからさまな敵意』を示した。そして、大声で、“Über den ベエールゲン!”と始めた。その下卑た態度と話し方に、一度でドイツ語が嫌いになった。それでも大学の教師かと思った。それっきり、彼の講義には一度も出なかった。ついに、1学期は「不可だ」と言って

きた。「落第ですか？」と聞くと、「2年間の平均で決める！」と言った。人騒がせな奴！とだけ思った。

「旅の日のモーツアルト」を、「ヒゲ文字」のドイツ語で学生に強要するのが、「好きで・好きで堪らぬ」教師！日本語で読んでさえ支離滅裂な、ワーグナーの「未来の芸術家（論）」を、一人で酔ったように訳し続けて、挙げ句の果ては、ワーグナーの「夕日のアリア」とかを、教壇に突っ立って唄い上げる程、ワーグナーにイカレタ教師！ トニオ・クレーガーの「少年の日の同性愛」のような、「他愛のないドイツ文学」が、お好きな教師！2クラス合同の大教室で、最前列の数人にしか説明しない「力学」の教師。「物理学概説」を棒読みにして恥じない、「光学」の講義！およそ信じられないようなことが、至る所で、毎日のように起きていた！

「学友達」は、皆、黒い新品の詰め襟服に、四角い学帽を頭に載せていた。高校の時から、父の中古のジャケットを、次々に着潰して通学していた眼には、「駅員の学校」かと見えた。『ガツガツしてばかりいて、そのくせ、切れる奴はいない！』と思った。「経済学」の講義が、公会堂のような大教室で終わると、久しぶりに高校時代の友人が集まって、憂さ晴らしをする：「何だアイツは！経済の関数ってのは、連続関数か！」と、まず林君が口火を切る。「オレだって別に、1秒ずつ、小遣いを使っている訳じゃないからなあ！」と、横倉君がまぜ返す。「連続としてやってもいい！連続でも、いたる所微分不可能な関数があるなんて、アイツ、何も知らねえんだ！」と、林君は追求の手を休めない。「よせ・よせ！どうやら時間のムダのようだから、オレはもう出ない！試験さえ受かりゃいいんだろう。何とかなるよ」と、こちらはもう「逃げだす」ことに決める。

そんな或る日、本館の暗い廊下で、駒林誠君に会った。「よう、フジタ、来たな！待ってたぞ！」という。「話がある」と言って、横の教室に入った。「いずれ、教養学部 of 授業が終わると、本郷の学部 of、行く先を決めることになる。今度、理学部の地球物理に、磯野先生の『物理気象』という講座が出来ることになり、オレはそこへ行く。君もここが終わったら来ないか？

そこで、ボクと一緒に物理気象をやろう！」と誘う。駒林君の言うことから、悪い話の筈がないと思った。更に、彼はこう言った。「教養の成績なんて、どうでもいいんだ！ 理学部の、しかも地球物理に来る奴なんか、殆どいない。だから、二年間、君のヤリタイコトだけをやって来いよ！ 但し、落第だけはするなよ！」。これは好い話だ。しかも「理学部」というのが気に入った。それで、15分としないうちに、「ウン。そうするよ！」と約束した。「ジャア、待っているからな！ 磯野先生にも話をしておくから！」ということで、別れた。

「2年間、君のやりたいことだけをやって来い」と言ってくれた、駒林君の提言は、筆者のこれ迄の人生の中でも、五指に入る素晴らしいものだ。東京大学という「苦海」に身を沈めて、その「悪に染まる」ことが少なかったと、もし、言えるならば、その一半は、駒林君の此の適切な提言のお蔭だ。他の一半は、もちろん、アメリカにおける「猛烈な洗浄作用」である。

駒林君は、中学4年で一高に入学した。我々が新制高校2年になると、旧制の4年に当たるというわけで、最後の旧制高校受験のチャンスが来た。これが最後だというので、殆ど全員が一高を受けた。まず、本気で受けた人などいないと思っていた。しかも、一高の校舎の中は、おそろしく汚い。裏の並木道には、黒いマントを着た二人の「時代錯誤」が、木の枝を振り回して、大声で歌をわめき散らして歩いている。試験場に座る前から、「嫌な所だ」と思った。英語は、「ディクテーション」をやるという。やがて現われた教師は、教卓に右肘をついて、体をくねらせると、黄色い歯の口を開いて、「ホースイズ・アユースフル・アニマル」と始めた。それが、Horse, Hose, Fourth, Forth, Force のどれとも聞こえた。最初から、戦意などないので、窓の外ばかり眺めて帰った。

それが、大分経ってから、駒林誠君と、塚本健君の二人が合格したという噂が伝わってきた。駒林君は、戦時中の疎開で、どこかに行ったきり戻って来なかった。駒林君も、塚本君も、在校しているのは知っていたが、話をしたことはなかった。「へえ！ 合格する人も居るんだねえ！」という印象を

受けたが、いつの間にか、意識の中からは消えていた。しかし、その駒林君の提言のお陰で、つまらぬ 1, 2 年生と、下らぬ 3 年生の 3 年間の講義を、人ごとのように、平然と聞き過ごすことができた。

その後は、彼との約束を守り、お蔭でかなり楽しい 4 年生、気楽な『物理気象』修士の 2 年間、を送る事が出来た。しかし、「好事魔多く」、やがて舞台が急転回した。後で述べるが、仕方なく彼等と別れ、玉木英彦先生の所に転がり込み、マジメな「放射線物理」修士の 2 年間をやり直し、更に「象牙の塔」の博士課程の 3 年間で過ごした。終ってみると、再び道は、行き止まりのように見えた。幸い、川村肇先生に「捨て子がいる」というので拾われた。それで、「東大附置物性研究所」で、肉体労働ばかりの 4 年半を送ることになった。やがて、ここの任期も終り、気が付くと、今度は流れ流れて、アメリカ中西部のイリノイ大学で、『赤い夕日に照らされて』、オフィスで机に向かっていた。

どうも今迄の人生には、「あの時は『全力投球』でやった!」という、完全燃焼の真剣味が何処にもなかった。幸い今度は、小うるさい日本人は見当らない。思い切り勝手にやっても、よいらしい。ではやってみるか、という訳で、手始めに、グリーン・ライトのフォレットに寄って、“Principles of Optics : Born and Wolf” を \$17.50 で買い込んだ。今迄に、一度だって、本の第 1 頁から 1 行ずつ、ローラーをかけるように読んでいく、などというスタイルの勉強をしたことはない。それでこの時も、本の間に沢山のシオリを挟んで、あっちを見、こっちに飛びしながら、オフィスの机の上で読んでいた。

やがてフレッドが、このボルン・ウルフを見付けると、彼も買い込んだ。最初の年は、フレッドと二人だけで仕事をした。話をしていると、どうしても式が必要になる。二人で、部厚いボルン・ウルフを覗き込みながら議論をしている図は、まるで中世の修道僧が、厚いバイブルをつつきながら、神学の議論をしているような趣があった。

或る日、フレッドの所でボルン・ウルフを開いた時、『ハッ!』と思った。

みるみる、頭から血が引いてゆくのが分かった。経験のない人には判るまいが、脳貧血になると、視野の周辺から、真っ黒な、コンプのような気味の悪いものが、ニョロ・ニョロと動きながら延びてゆく。放っておけば、視野の真ん中まで黒くなって、ついに倒れる。倒れれば脳に血が戻り、意識はすぐ戻る。しかし、みっともない。反対に、「頭に血が昇る」と、視野の中に、ギラギラと金色に光る、蛇の目玉のような点が二つ現われる。たいていは、ゆっくりと滑りながら、視野の外に出て終わる。しかし稀には、ワープロの液晶画面のように、全面が金色に光り輝いて、眩しくて堪らない。眼を閉じてでも消える訳ではないから、「これは死ぬか!」と思う。しかし、これまでは死なずに来た。どちらも気味が悪い。それで、気づかれぬように、うつむいて頭を低くしていると、コンプは収まった。

“Principles of Optics”: Born and Wolf, Third Revised Edition, p.263, Fig. 7.8 の “Billet’s split lens” は、なんと!、『サスガ!』と人を感嘆させ、『こういう学校なら是非入りたい!』と、今でも忘れられぬ『憧れの気持ち』を人に抱かせた、『入学試験の問題』、そのものであった!

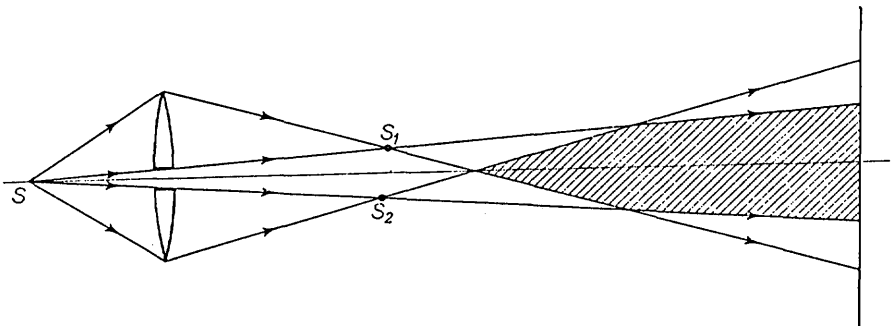


図 2

1950（昭和 25）年度・東京大学理科Ⅰ類入試問題（物理）中の一題

『この時の気持ちを、何と表わしたらいいのでしょうか！』というのが、こういう場合の、普通の表現法である。筆者も、まずそれを言うより他はない！ 続けて、文科の人たちに、誤解されるのを百も承知の上で、まずこう言いたい。「自分は、突然、無限に深い井戸の底にいたのを発見した！」。これを、急いで、文科の人たちに説明すると、ここでいう「井戸」というのは、「井の中の蛙」というような、狭いものではない。それどころか、筆者の発見したのは、『自分は、東西南北、地平線までも見渡せるような、広い平原を、自由に走り廻っていると思っていた。しかし、見えない「遠い遠い地平線の彼方」には、無限に高い絶壁が取り囲んでいて、どうしても、自分には登り切れないということを悟った！』。物理屋は、これを「無限に深い井戸の底」と表現する。今は、それが、『学問の伝統の落差』というもののなのである！

フレッドはハーヴァードから来た！ ジョン・ホドビーはオックスフォードから来ている！ バックラックは3年半で、イリノイでドクターを取ろうとしている！ 皆、一流の連中だ。しかし、こっちだって、「日本を代表するはず」の東京大学で、『好きなように』勉強して来た！ 一歩も引くものか！ それで、あれだけ強く、フレッドと渡り合えた！ それがなんと！ “University of Göttingen and Edinburgh” と、“University of Rochester” の、二人の共著のテキストの、『デッド・コピー』を入試に出していたとは！ やってくれた！ 東京大学とは、『その程度』の大学だったのだ！ 何という『無能な連中』の集まりか！ これでは、こちらは「虚勢を張っていた」ことになる！ フレッドとも、ホドビーとも、ボブとも、同じ平原に住んでいると思っていた。しかるに、彼等は絶壁の頂上に、いつでも登ることが出来る！ だがこちらときたら、この地べたの上をミミズのように、一生、這いずり回る他はないのだ！ (Oh, Hell!)

筆者は、この手の「打撃」からは、かなり簡単に回復できる。早いときは、一晚寝れば、忘れてしまう。しかしこの時は、随分かかった。三宅さんのオフィスで、山田さんが「YMCA に電話してミイ？ オレはようせん」と言ったときには、何も知らずに元気だった。それが、1967年3月27-30日の、

シカゴ“Spring Meeting”の間は、完全に沈没していた。シカゴ・コンラッド・ヒルトンの、立派な舞踏会場で開かれた特別講演では、誰にも会いたくなかった。それで、誰もいない二階の席に一人で座った。眼の下、美しいコバルトブルーの絨毯の上には、四角い演壇が作られ、カルドナが煽り、ヘンドラーがアジッていた。フロアに詰め掛けた聴衆からは、息もつかせぬ米語の質問が、次ぎ次に斬り込んでいた。話題は、当時最先端の、モジュレーション法の話で、皆エキサイトしていた。

二階には鏡張りの柱がたくさんあり、明るいシャンデリアと、筆者の冴えない顔が、どちらを見ても映っていた。“Les Enfants du Paradis”（天井桟敷の人々）の、フィナーレのシーンだけが、やけに胸の中を過ぎていった。イリノイにいては、「天井桟敷」の心境を訴える相手など、どこにもいなかった。

やがて、二つの結論を拾って、落し穴から這い出した。一つは、『もう、あんな学校を卒業したなどとは思わない。免状を返せと言うのなら、いつでも叩き返してやる!』と思った。「出世する方法」などという本に、よく、「ボクがオックスフォードにいた『頃』』というような、言い方をしろ、と書いてある。人は、勝手に、「この人は、オックスフォードの卒業生だな」と思うという。実は、学会に行っただけなのである。そういう、「雰囲気」を身の回りに漂わせるのが、出世には大事だという。間違っても、恥ずかしくて、そんなことが出来るか! あの学校は、そんな立派な学校じゃない! 「新政府」急造の、只の「成り上がり者」をかき集めた学校だったのだ! 以前、夕日を受けたユニオンの“Alma Mater”を眺めたとき、「この仕事はイリノイ・ウイスコンシンの、卒業実験だったのだ」と書いたのはこのことである。

二つ目の結論は、実験がスタートするまで、幸いあと1年はある。その間に、「乱読と乱見」を徹底しようと決心した。「乱読」とは、昼食などでユニオンに寄った帰りには、ユニオン→学生書店→フォレットの三点を必ず廻り、ドーバー・ペンギン・AP・などを手当たり次第に買いまくる。金に糸目は付けない。それをオフィスで斜めに読み飛ばす。相当な量になった。そ

の殆どが皆、帰国後、日本のレフェリーとのケンカの種になった。「乱見」とは、授業になると、教室の入口の机に、その講義のアブストラクトがプリントされて、うず高く積んである。通りがかった時は、映画館の「チラシだ」と思って、一枚取って必ず読もう。よさそうだったら、歌舞伎の「一幕見」だと思って、必ず入ろうと決めた。クルーガー老先生の話、ベイムのオペレータのフォーマリズムの話。誰かのⅡ-Ⅵの話を知っていると、“Doctor Fujita's very fine careful experiments”と言った。誰だろうと思って聴いていると、物性研の我々のデータを OHP で見せたので驚いた。世界は狭い。もっとも、先生が前を向いて黒板に字を書きだすと、前の席に並んで座っていた二人が、横を向いて向き会おうと、サッとキスした早業にも驚いた！

§Ⅱ-3 The Burning Bridge is Behind Me

「二年間、君の好きなことをやってこい」と言ってくれた、駒林君のアドバイスを受けて、まず「ロシア文学」から始めた。中学の夏休みの宿題に、馬場弧蝶訳の「戦争と平和」を読み上げた。「よく、このロマンが読み切れましたね」と誉められた。それで、「戦争と平和は、『ロマン』であって、軍記物ではなかったのだ！」と悟った。以来、大きな借金を感じていた。奨学金を殆ど生協の書籍部で使い、米川正夫訳の、新しい「戦争と平和」がついに終わった。今度はよく判った。それで、ツルゲーネフにも手をだし、ついでに、ゴーリキーも読んでみた。これは、うんざりした。口直しにチャーホフをあさった。飽きた。一転、ドストエフスキーに取り付き、ついにロシア文学にさよならした。最近知ったのは、「テンカン」の知識を深めてからドストエフスキーを読めば、よく理解できるという。ちょうど、「鬱病」の知識を深めて漱石を読めば、よく判るのと同じだという。だが、もう今更そんな暇はない。しかしお蔭で、ロシア文学の「時間と空間のスケールの大きさ」を満喫した。ドイツ語のリーダーの、せせこましい話など、バカラシクテ、到底時間をかける気になどなれなかった。

その間、フランス語のクラスを渡り歩いた。中学1年生の時に、ファールブルの「昆虫記」にイカれて以来、南フランスの砂原を、地上最高の聖地のようになってきた。それを、一介のドイツ語の教師が、「アー・ペー・セー・などと！」と侮辱した。それで、「よーし、やってやる！」とためらわずに、第3語学の枠に出た。1回目・2回目には、大量の理科生が出席した。しかし、3回目からは、潮が引くようにいなくなった。授業もそこから始まった。すぐに、ラテン系の言語は、英語、ドイツ語とは全く異なる言語体系だと知った。殊に、「時間経過の連続的概念」が素晴らしい。もちろん単位など取る気はない。それで、テキストに飽きたら、すぐにクラスを代えて、渡り歩いた。「物心両面の荒れ果てたキャンパス」の中で、よそのフランス語のクラスに潜り込む時だけ、「ここはどんなかな」と思い、「楽しい」と思った。

『最後の授業』が終わるクラスでは、“Vive la France! Vive la France! Vive la France!”と読み上げると、教師はサッとドアを開けて出ていった。上手い演技だとは思ったが、暫らくは席が立てなかった。後年、これをミシェルに話すと、「あんなものは、『フランス人』の書いたものだ!」と、散々だった。アルザシアンは、自分達はフランス人だなどとは思っていないのである。

土橋君がロシヤ語をかじり、肥田潤君も、「あのヤバンな字も、読めるくらいにはしておいた方がいいよ」と言っていたので、第3語学の、ロシヤ語のクラスも、時々覗いてみた。ただ、教師はポリシェビキがヒイキらしく、レールモントフの詩を「貴族的だ!」と散々にけなした。ロシヤ語も、動詞の「完了態」の「時間感覚」には感嘆した。

男が女の家の戸口で、ドアをノックしようか、どうしようかと悩む。ふらっと足が動き、パッと立ち止まる。その『動作の始まる瞬間』、或いは、『終わる瞬間』を、「一回こっきりの、特殊な動作」と認識する。これは、ずっと続く普通の動作とは違うと考える。この『瞬間』を、「特製の動詞」を使って、一言で表現してくる。今、主人公の心は千々に乱れ、何度もグラッ・グラッと立ち止まる。こんな状況を、「パスタヤール・パスタヤール」と簡単に表現してしまう。日本語には、こういう、「鋭い瞬間」を表現する能力があっ

たかなと思った。日本人は、「呆然として立ち尽くした」というような、「静止した動作の思い入れ」の方が、好きなのではなかろうかと思った。歌舞伎役者が大見得を切って、動作が停まる。感極まって「タヤーッ！（音羽屋）」という掛け声が、二つも三つも掛かる。大見得はまだ続く！ ついに「入船町！」という、『通』の澄んだ掛け声が響く。すると、やっと役者の形が解ける。これはその証拠だと思った。

後年、ロシヤ語は役に立った。玉木英彦先生の所に転がり込むと、大学院ゼミの「生物物理」の輪講が、ロシヤ語のテキストだった。DNA がどうの・ワトソンクリックがどうのと、玉木先生が訳されるが、かなり早い。玉木先生は、「頭の悪い学生は嫌い」である。幸い、先生の所の五年間に、一度も叱られたことはなかった。しかし、もしロシヤ語が出来なかったら、どうだったか。さあ？

「勉強」はと聞かれば、「ベクトル解析」をあげる他にない。まず、田中正夫さんの、「微分幾何学」に出席した。これには、千秋鋭夫（トシオ）君が出席していた。後年、彼は、「あれは選択だったぜ」と言うが、どうもよく覚えていない。田中さんは、一高時代からの先生で、一高では「メンゲ」（集合論）というあだ名だったそうである。非常に楽しい講義だった。まず、田中さん自身が愉しんでいる。豊かな・真っ白な髪に、黒の三つ揃いをきめて、教壇の端から端までを、跳ねるように移動する。そして、自称「エビの佃煮」の、 $(\partial/\partial x)$ を書きまくる。聞いていれば、筋は何とか付いていける。しかし、ノートは白紙である。かと言って、ノートを取っていても付いていけない。

いつも、第1列の中央、つまり教卓の真下には、千秋君が頑張っている。筆者はいつもの習慣で、数列後で左の窓際に座る。講義が退屈になれば、すぐに窓の外が眺められるからである。従って、筆者の右前方45度の所に、千秋君が見える。黒の詰め襟の学生服に、華奢な身体を包んで、髪をぴったりと撫で付け、小首を傾げながらの、いつものポーズである。「このクラスで判っているのは、アイツ一人なんだ！」と、いつも思った。時々、田中さ

んが両腕をつき、両手で教卓の縁を握みながら、真下の千秋君を見下ろして、にこやかに語りかける。千秋君が見上げる。それはまるで、コウチャンのファンが、宝塚のカブリツキで、うっとりと越路吹雪を見上げているような風情があった。

最後にはレポートを出せと言った。ノートがまるで白紙なので、水道橋から神保町迄本屋をあさり、「矢野健太郎著・微分幾何学・朝倉書店」を買った。「No. 28 1951. 11. 16 神田神保町付近にて」と記入がある。No. 28 というのは、奨学金を貰うようになってから、買った本の通し番号である。どうせ奨学金は、何に使ったのか分からなくなる。せめて本だけでも、記録しておこうと思った。11月16日だから、講義は1年生の後期である。レポートには、「 n -次元空間における、ベクトルの直交性」という題を自分でデッチ上げた。だが、3行も書くと書くことがなくなった。田中さんは、「訳の分からぬレポートがあった」と講評した。「あれは、ボクのことだ」と、気恥ずかしく思った。もちろん、採点結果など確かめたことはない。しかし幸いに、「空間論」に対する興味は残った。

この際だから、ベクトルを本格的に勉強しようと思った。それでまた、水道橋から神保町へと、本屋を一軒ずつ覗いて歩くことにした。水道橋の「歯科大学」のビルが終わると、隣にかなり大きな本屋があった。一度神保町迄歩き、また戻り、随分長いこと吟味して、ついに「伊藤徳之助著・応用ベクトル解析・丸善」を買った。「No. 55 1952. 6. 6 水道橋付近にて」と記入がある。¥550 だからかなり高い。1ヶ月の奨学金が、¥1,800 位だった。ところが、これが素晴らしい本であった！

内容は、ベクトルの演算から始まって、力学・微積・電磁気・流体・アフィノール・幾何光学・剛体・弾性・粘る流体と続く。古典物理学のミイラの骨格が、X線にかけたように、ベクトルとアフィノールで一貫して透けて見える。筆者のような分裂気質の人間は、「システムの体系」、つまり話の筋を、まず早く知りたがる。それも判らずに、細かいことばかり言うのは、下らないという気持ちが強い。もっとハッキリ言えば、「アホのやること」と思っ

ている。一方、東大教授になるような人達は、たいていが躁鬱気質で、四角な煉瓦を一個づつ綺麗に磨き上げ、きちんと積み重ねて、ピラミッドなりゴシックなり、「完成」しないと、「仕事をした」と思って安心出来ない。彼等は新しい仕事を切り拓いていくなどという、『雑な仕事』は、決して出来ない人種なのである。彼等は、『神は細部に宿り給う』と、本気で深く信じている。

——何たることぞ！ またであるか！ 建築を始める前に必ず知っておくべきであったことを、ようやく建築が完成したときになってさとしたことを、ふと自覚する。この永遠のいたましき『おそすぎた！』の嘆き、いっさいの完了せる者の悲哀！（ニーチェ：「善悪の彼岸」より）——

「定年退官記念論文集」を発行し、そうそうたる「お弟子さん達」が、キラ星のごとく「論文」を列ねても、3年と経たずに紙屑となる。彼等の晩年が、「鬱」に過ぎるのは故なしとしない。彼等はついに、一度として、“Under Construction”の泥まみれの仕事に、手を汚そうと考えたことがない。従って、我々二種類の人間が、お互いに「仲良く暮らす」などということは、とうてい出来ない相談なのである！

伊藤徳之助教授の本は、この両者が共に満足出来る、稀な本であろう。当時から、この本さえ読んでいれば、学校へ行く必要などないと思っていた。3年生になると、「汚い別館」で「系統性のない、日替わりランチ」のような講義ばかりを聞かされた。当時、こちらは、随分、皆とは違うことを考えていた。大山武彦君が中心になって、我々だけで、遠山啓さんの「行列論」の輪講を始めた時だけ、本気で参加した。駒林君の提言を、自分で勝手に2年から『3年間』に延長して、追試にさえ引掛からなければ、「別館の講義」など、どうでもよいと思っていた。事実、自分の成績を見たのは、4年生が終わり、朝日新聞をギリで受けに行くことにしたとき、「成績証明書」を貰ったのが、最初で最後となった。もっとヒドイ成績だろうと思っていたので、それ程とも思わなかった、ということしか覚えていない。

実験は、駒場の学生実験の時代から、シャキ・シャキとこなしてきた。前

日、十分に時間をかけて、マニュアルをよく読んでから出かける。物理実験の助手が、実験室のドアを開けるのを待って入ると、直ぐに実験を始める。高校時代の、「物理部」の実験道具より少しましという程度なので、直ぐに終わる。学友諸君は、昼飯を終え、到着してから、やおらマニュアルを広げて読みだす。ところが、これが物凄い文章で、そんな一時間やそこらで、判るようなシロモノではないのである。やがて 30 分も経つと、相棒の間野忠君がやってくる。「今日のデータはこれだけだ」と言ってノートを見せる。「フジタと組むと、助かるなあ!」と言って、データを写すと終わりになる。一度だけ、助手に見つかった。「もう終わりか! もっと丁寧にやれ!」と言う。こんな道具で丁寧もヘチマもない。実験室に戻り、しばらく間野君と雑談をして、助手のいなくなったのを見届けると、「長居は無用」と逃げだした。

間野君は、駒場寮に住んでいた。一高時代の地下道が、寮と本館を繋いでいる。それで、真っ暗闇の中を進む勇気さえあれば、雨が降っていても傘なしで、授業に出られる。それで、彼は朝の 1 時間目のドイツ語にも、真面目に出席していた。こちらが、殆どドイツ語を無視しているのを知っている。試験が近づくと、「オレのドイツ語のテキストの、書き込みを写せ」と言ってくれる。そして 3 冊のテキストを、寮の自分の机の上に揃えて、待っていてくれる。実際は、3 教科半年分だから、とても写し切れるものではない。試験の範囲を聞くと、片っ端から、ドイツ語と彼の書き込みとを読み較べてゆく。「どうも徹夜になりそうだ!」と言うと、「オオいいぞ。同衾してやるゾオ!」と、どぎついことを言う。その実は、「他の部屋に空いている寝台があるから」と言って、何処かで寝てきて、朝迄使わせてくれる。

「同衾してやる」という布団を眺めると、間野君のような、気の毒な「貧乏学生」を見たことは、一度もないと思った。布団がわは、ごわごわの白い木綿であるが、垢と寮の埃で真っ黒である。綿が偏っていて、布団というよりは、袋に綿を入れたようだ。机の上には、テキストと辞書・数冊の本・丸いアルミ笠の付いた電気スタンド・それが彼の財産の全部である。「オヤジ

は、日本で最初に飛行機が飛んだ時の操縦士だった。しかし残してくれた物は、クルミの木のプロペラが一本、壁に掛かっているだけだ」と言った。

クラスには、加藤正昭君もいた。彼は、府立五中の出身で、「加藤隼戦闘隊が」と言いかけると、「貴様、シャベルナ！」と口止めされた。こちらは、こうして44年間、彼の言い付けを守った。しかし、どこかから漏れていた。ウイスコンシンに行くことになり、彼がその前にマディソンにいたのを知っていたので、様子を聞きに一度小金井の自宅に行った。非常に質素な家で、家具らしい物は殆どなかった。マディソンの記念品も、パイプ一本だけのように見えた。後年、加藤君の結婚式に呼ばれた。30人ほどの質素なものであったが、第1列に並んで立っていた4人程が、「直立不動」の軍隊式姿勢のまま、「加藤隊長の前に出たような気がして、非常に嬉しい！」と、涙ながらの大声で祝辞を述べた。現在まで、あれほど心の籠った祝辞を聞いたことは、他にない。

2年生後半の、小野健一さんの「電磁気」の講義が始まった時から、新しい悩みが始まっていた。「グラディエント・オペレータは、なぜベクトルであるか」と言うのである。3年生になると、ますますこの悩みが嵩じた。どんな立派な先生の「名講義」も、何の役にも立たない。伊藤さんの本を見ても、良く分からない。それで、一人で散々に悩んだ。本郷の図書館の屋上に一人で立ち、閲覧室に一人で籠り、休憩室に座り、山へ登っても、電車に乗っても、幾ら考えてみても判らない。「別館の友人達」は、「内積を計算すれば、答えが合うんだから良いじゃないか！」と言った。何の答えにもなっていない。試しに、加藤君にも聞いてみたら、「フジタ、貴様！ 未だそんなことを！」と言った。

最近、必要になって「ヒルベルト空間」の本を覗いたら、あった！「 n -次元実ベクトル空間・ n -次元複素ベクトル空間・線形関数空間・写像・汎関数・『作用素・演算子』」。43年間、思い悩んでいた霧が、みるみる晴れた！ もちろん知っていた：日本の物理屋の「ベストセラー」の教科書には、「 $(\partial/\partial x)$ を x 成分とするベクトル(?) のようにみなすのである」などと、

(?)までつけて(誤魔化して)ある！ 東京駅八重州口の、ブックセンターの、物理の書架の前に立ったときの「驚愕」！ 40年も昔の「大先生」の本と、殆ど一字一句違わぬセクションの名と、その配列の本！ ゼロックス・コピーのように、同じ図を示して繋がる「仲間達」！ 「ベースの時間変化する系から、ベクトルの時間変化する系への変換」などと、あいも変わらぬオソマツで、古典力学・量子力学を語る！

『もう嫌だ！ 貴方達とのお付き合いは、疲れる！ 貴方達のこういうやり方が、どの位日本の物理を低俗化し、学問を毒してきたか！ 貴方達のやっていることは、中学・高校生の、「外国はがし」と同じだ！ その罪は大きい。これでは、貴方達には、「新しい物理学」を切り拓くどころか、付いていくことさえ出来なくなる日が、すぐにも来るだろう！』

この話を、電通大の非常勤講師室で、いつの間にか親しくなった、二人の数学の友人にした。彼等とは、年末になると、調布の場末の焼き鳥屋で、三人だけの、「小さな忘年会」を開く。二人とも、「物理屋さんというのは、よう判らんことを言うから、付き合わんことにしている！」と言った。

4年生になり、授業が旧浅野邸の教室に移ると、前田 VS 浅野の因縁か、今度は、「物理教室の『数理物理』など、あんなクダラヌものはブツリじゃない！」と聴かされた。向こうでは、「寺田物理など、ブツリじゃない！」と言っていた。こちらでは、もちろん、「寺田先生」と言っている。ブツリとは、仲々難しいものだと思った。浅野方には、先代から「本郷西片町」に住み、大学には「歩いて通学」をし、その上、父も兄弟も東大教授という、“Ancien Regime”が多勢いた。対する物理教室は、“Nouveau Riche”ということになろう。

Ancien Regime も悪くはなかった。浅間にある東大地震研究所附置の、火山観測所に、3年生の夏に長期のアルバイトに行った。所長の水上武教授は、

食後の雑談に、「君はいかにも学生らしい学生だ。君は将来、板張の床に、ゴザを敷いただけの部屋の隅で、ミカン箱を伏せて、その上で論文を書くのだ！」と励まして(?)きた。当時、「戦争と平和」を読み返していたので、「私はそんな生活はイヤです。天井の高い、大理石の床の書斎に、厚い大理石で出来た、大きな机を置いて、その上で勉強したい！」と、超・貴族的な返事をした。「いやいや！ そんなの君にふさわしくない！ ミカン箱の上で、君が論文を書いている側では、奥さんが、七輪でバタバタと魚を焼いているのだ！」と、今度は、カミサンまで押し付けてきた！

次の日、所長室のマントルピースの前で、コーヒーをご馳走になっていると、「君の論文は、是非フランス語で書き給え！」と、「給え：S'il vous plait！」という言葉で学生相手に使って、更に念を押してきた。「今からフランス語の勉強を始めれば、丁度よい。若いんだから、AIMER（エメ：好きだ）の活用から教えてやろう！」と言って、ER 動詞の人称変化を計算用紙に書き出した。少し間違いがあったが、「ハイハイ」と言って素直に聞いていた。「来年も、是非来てくれ給え！」というので、気をよくして、二夏を、浅間・軽井沢で過ごし、「荒廃したキャンパス」で受けた傷を、随分と癒した。もちろん、当時の軽井沢など、ガラガラだった。

あれから 40 年。今、フト気が付くと、安物のフローリングの床に、冬はホット・カーペット、夏は色織りのゴザを、直に敷いただけで、夏も冬も、ミカン箱ならぬ、ヒーターの切れたナショナルの電気炬燵の上で、皆に憎まれる『論文を書いている』ではないか！ 水上先生は、確かに、優れた『未来予測性』があった、と言わねばならない！

日高孝次教授の家も近くにあり、1 年の講義が終わると 4 年生全員を、「日高パーティ」に招く。先生の娘さんと大勢のお友達が、盛装で来ている。「ボックスなら誰でも直ぐ出来ます。さあ！」と言って、ワルツのレコードをかけた。イヤダ！ と思った。後年、ウィスコンシンのユニオンで、夜、学生が大勢騒いでいると、「ミクサーだな！ ヒイズは踊れるか」とフレッドが聞いた。「ボックスなら」と言ってから、「踊れないと言わずに済んで、

Handwritten notes and diagrams illustrating French grammar concepts, specifically pronouns and verb forms.

Pronouns:

- Je (I)
- vous (tu) (you)
- il, elle (he, she)
- nous (we)
- vous (you)
- ils, elles (they)

Be (être) (to be):

- Je ~~suis~~ suis
- vous ~~êtes~~ (êtes)
- il ~~est~~ est (avoir)
- nous sommes
- vous ~~êtes~~ êtes
- ils (elles) sont

Avoir (to have):

- J'ai
- vous avez
- il a
- nous avons
- vous avez
- ils ont

Aimer (to love):

- J'aime
- vous aimez
- il aime
- nous aimons
- vous aimez
- ils aiment

Imperfect Tense (aimer):

- J'aimais
- vous aimiez
- il aimait
- nous aimions
- vous aimiez
- ils aimaient

Conditional Tense (aimer):

- J'aimerais
- vous aimeriez
- il aimerait
- nous aimerions
- vous aimeriez
- ils aimeraient

Passive Voice (to be loved):

- Je suis aimé(e)
- vous êtes aimé(e)
- il est aimé(e)
- nous sommes aimé(e)
- vous êtes aimé(e)
- ils sont aimé(e)

Diagram:

A diagram showing a circle with a cross inside, and a line with a cross at the end. The line is labeled with the number 31.

Handwritten notes:

- 17
- 31
- 32
- 33
- 34
- 35
- 36
- 37
- 38
- 39
- 40
- 41
- 42
- 43
- 44
- 45
- 46
- 47
- 48
- 49
- 50
- 51
- 52
- 53
- 54
- 55
- 56
- 57
- 58
- 59
- 60
- 61
- 62
- 63
- 64
- 65
- 66
- 67
- 68
- 69
- 70
- 71
- 72
- 73
- 74
- 75
- 76
- 77
- 78
- 79
- 80
- 81
- 82
- 83
- 84
- 85
- 86
- 87
- 88
- 89
- 90
- 91
- 92
- 93
- 94
- 95
- 96
- 97
- 98
- 99
- 100

図 3

1953（昭和 28）年 8 月 12～22 日頃

東京大学・地震研究所附置・浅間火山観測所長

水上武教授の、著者宛て『フランス語個人教授ノート』

ヨカッタア！」と思った。

いよいよ、駒林君との約束どおり、磯野謙治先生の「物理気象研究室」に入った。正野重方先生の「数値予報研究室」にも、週一回、気象研究室全員の輪講があり出席する。正野研の河田君が、「机の、右側の引き出しを貸してやるから、使え」と言ってくれた。それで、書類を入れておくのに使っていた。或る日、引き出しを開けたら、3センチ四方くらいの、白い小さな紙が入っていた。綺麗な細いペン字で「蝶よ、あなたは不人情よ！ 今日、一日中追いかけていたのに！ ラディゲ」と書いてある。こんな妖しいもの、河田君宛に決まっている。どっちの引き出しが誰のだか、知らないからだ、と放っておいた。果たして、大分経つと無くなっていた。随分後で、話のついでに、「ラディゲの詩を書いた変な紙が、引き出しに」と水戸君に言いかけると、「貴様、ツケブミされたな。気を付けろ！」と言った。ラディゲをツケブミと表現するとは、やはり、前田邸の方が、浅野邸よりも文化の度合いが低いと実感した。

磯野研の物理気象は、駒林君の言った通り、楽しく過ぎた。理論的に難しいことなど何もない。実験には、年2回の野外実験もあった。これは東京電力の委託研究である。『人工降雨・人工降雪』の実用のための、基礎実験で、夏は奥万座の沢の中、冬は雪の日光戦場が原などに立て籠もり、浮世離れした3週間ほどを過ごす。「スモッグの主要な原因は、車の排気ガスである」というアメリカのレポートを、輪講で紹介すると、皆、「ウッソダア！」と言うような時代であった。

磯野先生は助教授であった。正野先生が教授で、二人で一講座ということであったのであろう。こちらの修士が終わるとき、磯野先生は名古屋大学に栄転するという。駒林君は助手として、だったのだらうと思うが、付いていくという。君は、高円寺の気象研究所の、伊東彊二さんの所に紹介するという。気象研には、磯野研の全員が隔週1回輪講に行き、愉しかった。しかし建物はオンボロだし、研究も古臭く見えた。一晚考えて、駒場物理教室の、玉木英彦先生の所に相談に行こうと決めた。玉木さんは、大学院担当の看板

に、科学史と放射線物理をあげていた。

ちょうど、ビキニの水爆実験で第五福竜丸が被爆し、世間が騒いでいた。人工降雪の効果判定をすっきりさせるために、散布するヨウ化銀のヨードに、放射性同位元素を使って、追跡してみてもどうかなどと、物騒な提案をしていた手前、放射線に興味を持ち始めていた。五月祭では、河田君が熱心に、五百ミリバールの高層天気図を描いて、第五福竜丸は立入禁止区域に入っていたなどという、一部の悪意ある宣伝に、真面目に反論していた。こちらは、丸・三角・円錐・の組合せで、半抽象風の「水爆展」のポスターを描いた。「別館」という場末なのに、初日の朝学校に行くと、テレビのカメラマンが数人、入口で待っていた。彼等はポスターと河田君の天気図を写すと、「ほかのはイイです!」と言って、真っ直ぐに本社に飛んで帰った。

物理気象もいいが、「相転移」の勉強には、水は複雑すぎる。ここらで商売を替えるのも悪くはないと思った。玉木先生に、放射線の人体に及ぼす影響の、基礎的な研究をしてみたい、と言うと、「修士の試験から受け直してくれるのなら、来てもよい」と言った。気象研はイヤだし、玉木さんは、「仁科さんの懐刀」と言われた人だし、「進歩的な科学者」と言う噂でもあったので、「悪いこともなかろう」と、出直すことにした。

修士を受験するというなら、勉強をしなくちゃと言う訳で、夏休みから、バツリと研究室に行くのをやめた。ついに、小野晃君が「どうしたの?」と言って、千駄ヶ谷の自宅にやって来た。「磯野さんのレポートを作っている」というと、「そうだったの!」と言って、みるみる安心した。嘘ではなかった。エア・マスが斜面を上昇し、水蒸気が凝結すると、潜熱が出る。それで、更に上昇力が付く筈だ。それは、どの位になるか。多分、誰もやってないと思った。今思えば、バカな話で、流体力学と熱力学を、ドッキングさせようと言う話である。プリゴジンを凌ぐ大仕事である。熱力学の「力学」とは名ばかりで、「時間」が入っていない。「準静的変化」といわれると、何となく、ソロソロと進むようにごまかされる。しかし実際は、一生掛かっても実現しないと言い直すことも出来る。それに気が付くのに、2週間かかっ

た。

では仕方がないと言って、ステップで持ち上げてみたが、これでは加速度が計算できない。やめた、と言う訳で、磯野さんが見ても、駒林君が検討しても、絶対に判らないように、式をやたらに並べて煙にまいた。

「受験勉強」は、どうせ「物理学概説・上下」程度であろうと、山をかけた。それも「統計力学」の他は、皆、教養程度である。統計力学のテキストの本文には、試験に出せそうな話はない。「問題」の方を見ると、フェルミ面の位置を決める計算が出ている。初めて見る話で、なるほどと思った。いい加減な近似計算なので、判ってしまえばそれ切りである。テストには、正にそれに類する計算が出た。誰でも出来たろうと思っていると、面接の時、宮本悟楼さんが「よく出来ますねえ」と言ったので驚いた。「そんな筈ありません」と、これは本音だった。玉木さんが隣で、「修士までやった人だから、当たり前だよ」と言った。出来ると言ったり、出来ないと言ったり、妙な教室だと思った。

これでもう、Ancien Regime には戻れない。背後では、めりめりと音を立てて、橋が燃え上がっていた。後年、東大物性研の助手になると、すぐに名古屋の磯野先生から手紙がきた：『…すぐ助教授に出来ない場合は、最初は講師として、助教授の位置をあけておき、適当な時に助教授ということもあり得ますが、これ等については□□さんに通じてから、話を進めなければならぬと思います。なお、助手・技官が、この講座についているとの事です。増設講座ですから、講座創設費がついていますから、実験機械等も買い易いと思います。そちらの研究所に良いポストの見込みがあれば別ですが（アンダーラインは著者）、もしそうでなかったならば、大変良いポストだと思いますので、貴兄の意向を伺いたいと思います。では御返事をお待ちしています。草々（昭和三十七年（1962）五月二十五日 磯野謙治 藤田秀様』：大変親切な、いいオファーだ。Ancien Regime の人達のよさに溢れている。今思えば、戻った方がよかった。しかし「もう遅い。Humpty-Dumpty は、もう転んでしまったのだ！」と思った。

（1996 年 2 月 13 日（水）記：つづく）

[APPENDIX]

“The belief in the deterministic nature of Newtonian mechanics was formally laid to rest by Sir James Lighthill in a lecture to the Royal Society on the three hundredth anniversary of Newton’s Principia. In his lecture Lighthill says ; I speak once again on behalf of the broad global fraternity of practitioners of mechanics. We are all deeply conscious today that the enthusiasm of our forebears for the marverous achievements of Newtonian mechanics led them to make generalizations in this area of predictability which, indeed, we may have generally tended to believe before 1960, but which we now recognize were false. We collectively wish to appologize for having misled the general educated public by spreading ideas about the determinism of systems satisfying Newton’s law of motion that, after 1960 were to be proved incorrect.”

「ニュートン力学の決定論的性格についての信念は、Sir James Lighthill がニュートンのプリンキピア誕生 300 年記念の際に、Royal Society で行った講演の中で、正式に葬られることになった。

Lighthill の講演の中で、彼はこう述べた：

私は重ねて申し上げます。世界中の、力学を取り扱っている仲間の皆さん、我々は、今日深く自覚しております。我々の先祖が、ニュートン力学を手にし、それを一般化して、予測可能性を得たと信じた、かの熱狂は、事実、我々も 1960 年まではそう信じていたのですが、今日では、誤りであったと認めます。我々は、皆さんにお詫びを申し上げたい。ニュートンの運動法則を満足するシステムの決定論を言い広め、一般の教育ある大衆を誤って導いたことは、1960 年以後は、間違っていたと言わなければなりません」。

（“The Transition to Chaos in Coservative Classical Systems : Quantum Manifestation”. L. E. Reichl, 1992. 藤田 秀訳 2/3/96）

「理論家は常に一步進んでいることが求められる。なぜなら理論家の仕事は数値計算家の仕事より何年も先行していなければならない。天文歴と観測結果との差が認められた場合に、ニュートンの法則が誤りであるのか、用いている理論が不完全なためにそうなったのかを知らなければならない。このような重要問題がこれまでなおざりにされていたのである」。

（“Les Méthodes Nouvelles de la Mécanique Céleste : H. Poincaré [1854-1912],

1899版・『ポアンカレ 常微分方程式』序文より)